居住地域における男性勤労者の交流拠点に関する考察

－杉並区における「おやじの会」による市民活動を対象として－

STUDY ON THE BASE OF FOOTHOLD FOR COMMUNITY BY WORKING MEN

From the actual condition of “Oyaji no kai” activities in the Suginami area

神野 郁也*, 谷口 元**, 恒川 和久***

Ikuya JINNO, Gen TANIGUCHI and Kazuhisa TSUNEKAWA

The purpose of these reports on “Oyaji-no-kai” are, first, to know the general tendencies of their activity locations and the common characteristics and aspects of their tasks. Second, is to clarify what it takes for a community base to get working men actively involved by analyzing the following three points: their activities, the activity locations, and the group network.

In this study, questionnaires and interviews performed with consent were carried out to 12 “Oyaji-no-kai” representatives which were based in public elementary schools in the Suginami area. Eight principle members of these groups agreed to be interviewed.

The study shows that “Oyaji-no-kai” are both organizationally and financially independent groups which focus on “socializing” and “support”. It also showed that the meeting style influences the group’s activities. The group provides a variety of participation styles by holding the meetings in two complimentary places: elementary schools and certain pubs.

Keywords : *base of foothold, working men, community, formal, informal*

拠点, 男性勤労者, 交流, フォーマル, インフォーマル

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

終身雇用制度のゆらぎに伴う会社神話の崩壊や、少子高齢化社会が深刻になる中、これまで家庭に無縁であった男性勤労者の地域社会への参加を促す声や、自治体などからも上がっている。また同時に、男性勤労者自身からも、会社の同僚との繋がりとは異なる新たなコミュニティを求める傾向が見られ、自らの居住地域に関心が向けられている。

一例として、杉並区では地域から離れていた勤労者を取り戻すために、さまざまな施策を試みている。その一つとして学校支援地域本部事業に基づく支援本部の設置など、大量に定年を迎える団塊世代の勤労者、とくに男性の地域活動への参加を促す取り組みがされている^{注1)}。しかしながら、このように男性勤労者に対して地域社会への参加要求はあっても、彼らには参加への契機が見つけられないのが現実である。その一因として、多くの男性勤労者は、若いうちから地域におけるネットワークなど、仕事以外の人間関係を構築してこなかったことが指摘されている^{注2)}。したがって、男性勤労者を組み込んだ地域社会の実現を目指すのであれば、男性勤労者の実態を考慮した^{注3)}段階的な地域参加を促す仕組みが必要となるだろう。

本稿では、男性勤労者のモデルとしてボランティア組織の一つである「おやじの会」に注目する^{注4)}。この会は小学校行事への協力のみならず、自ら主催のイベントも行っている。そして子どもを介し

て形成された父親中心の組織でもあり、妻子を持つ男性勤労者である彼らは、わずかな非労働時間の中で自らのコミュニティを居住地域以外に求めていくのは、意識の上でも、物理的にも難しいといえる。その意味で、子どもの学校と関連しながら組織される「おやじの会」は、彼らにとって会社の勤務時間外である希少なプライベートな時間を通じて、会社以外のコミュニティに、居住地域で参加できる数少ない糸口であると考えられる。

そこで本研究は、地縁社会との関係が希薄と考えられる都市近郊の一定エリア^{注5)}を対象にして「おやじの会」の活動場所の傾向や共通する特徴および課題を把握することを目的とする。そして、地域社会での活動、活動を展開する集団の場所、活動を展開する集団のネットワーク、以上三つの視点から考察することによって、居住地域への関心の高まりへの受け皿としての地域の拠点となる場の要件を明らかにする。

1-2. 既往研究と本研究の位置づけ

地域コミュニティに関する建築計画研究は多岐にわたるが^{注6)}、子供、主婦、高齢者を対象とした研究に比べ、男性勤労者を取り扱った研究は極めて少ない^{注7)}。これは初めに述べたように、地域社会から男性勤労者が疎外されてきたことに起因するが、こうした一連の先行研究において、男性勤労者は地域との係わりが希薄であるという前提が自明のものとされてきたことが背景にある^{注8)}。現代におい

* 名古屋大学大学院環境学研究科 博士後期課程・学修

** 名古屋大学 特任教授・工博

*** 名古屋大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Ph. D. Candidate, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, M. Arts
Designated Prof., Graduate School of Engineering, Nagoya University, Dr. Eng.
Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Nagoya University, Dr. Eng.

ては、かつては典型的であった個人の一生も多様化し、居住地域から男性勤労者を除外して考えることは、現状に即していない。この点においても、地域コミュニティの形成を進める上で、男性勤労者に注目することには意義があると考えられる。

地域における小学校施設に関する研究としては、菅原らの地域と学校の連携に着目した研究¹²⁾や、牛丸らのコミュニティ・スクールの建築計画と運営に関する研究¹³⁾などがある。また地域での飲食店に関する研究としては、曾根らによる地域の飲み屋での交流に関する研究¹⁴⁾などがある。それぞれに地域での交流拠点としての有効性を指摘しているが、「公」・「民」である二つの空間の関連性を取り上げたものではない。

「おやじの会」を対象とした研究としては、澤井による地域社会と学校の在り方に関する研究¹⁵⁾、近藤による地域参画要件に関する研究¹⁶⁾などがあるが、「おやじの会」の活動と交流拠点との関係については調査されていない。

1-3. 調査の概要

本稿では公立小学校を拠点として活動を行っている「おやじの会」に限定し、検討を行った。同様の会は小学校に限らず結成されているが、特に小学校における組織率が高い。これは6年間という在学期間の長さが、組織を円滑に運営・継続していくことを可能にしている、という理由も考えられるだろう。対象地域としては、東京都の西部に位置し約53万人が暮らす杉並区を選定した。この地域では市民活動への意識が高いことが近年のNPO組織の伸び率からも分かるが^{注9)}、「おやじの会」の活動も活発である^{注10)}。杉並区には43校の公立小学校があり、そのうち28校において「おやじの会」の活動が確認されている^{注11)}(図1)。そこで、調査の了承を得た区内で活動する12の会の代表者に対して、活動の実態をとらえることを目的としたアンケート調査及び聞き取りによるアンケート内容の補完調査(調査Ⅰ)を実施した。さらに、インタビュー可能な8の会に対し、その中心的なメンバーにインタビュー(調査Ⅱ)を行った(表1)。

本稿では、まず、12の会について全般的な傾向を把握するための分析を行う。そして、「おやじの会」の重要な活動の一つである会合に注目し、会合を定期的に開催している「おやじの会」と、定期的に開催していない「おやじの会」でのイベント活動の社会的・空間的な拮据について比較分析する。さらにメンバー間の交流と継続性に着目し、その交流拠点の意味を考察する。

2. 「おやじの会」の概要と活動の傾向分析

ここでは、調査Ⅰによる12件(A～L)のアンケート結果から、組織の傾向と「おやじの会」で行われている主要なイベントとしてあげられた65件の活動についての傾向を分析する。ただし、設立時期については、「地域活動を楽しむ会」^{注12)}によって作成された資料から11件の「おやじの会」データを追加した23件を対象とする^{注13)}。

2-1. 設立時期と契機

調査対象とする23件の「おやじの会」の設立時期を図2に示す。継続年数は、平均すると11.5年程度(2010年調査時点)である。設立時期は1987年が最も古く、1992年から増えはじめており、2000年頃より多くの会が設立されている。この時期に「おやじの会」が盛んになったことの一因として、1990年代、男性勤労者に自由な時間ができたこと、さらに小学校が週休2日制^{注14)}となったことで、

図1 杉並区おやじの会分布状況

表1 調査の概要

調査Ⅰ：アンケート調査	
抽出した「おやじの会」	28件
回収数／アンケート調査依頼数(回収率)	12件／18件
アンケート実施時期	2010・1～2010・3
組織について	
設立時期#、会の形態+、設立の経緯・目的#、メンバー数#、メンバーの獲得方法*、広報活動*、連絡方法*、代表選出方法+	
会合活動について	
会合の開催頻度+、参加人数+、目的*、開催場所*	
イベント活動について	
活動場所*、開催時期#、関係組織*、参加者*、企画内容#、参加人数#	
その他	
問題点*、波及効果*、今後の希望(場所、組織、内容)#	
各種活動に関して詳細が記された資料の収集	
調査Ⅱ：インタビュー調査(会合について：流れ・場所・新規加入者およびOBの参加など)	
依頼した「おやじの会」(調査Ⅰに対する回収率)	8件(67%)
インタビュー実施時期	2010・3～2010・5

凡例：+は選択肢からの単純回答、*は選択肢からの複数回答、#は自由記述

小学校を活動に利用できる時間が増えたことも影響していると推測される。

契機としては、PTA・学校長などからの呼びかけも見られるが、「有志の父親たちの呼びかけによって設立された会」が8件と最も多い(図3)。調査Ⅰにおけるアンケートでの「おやじの会」Dによる自由記述の回答からは、「PTAに男性が一人もいないのに驚いた」[q03-D](以後、アンケート調査でのおやじの会-Bによる質問05での自由記述は[q05-B]のように表す)といった男性が関わっていない状況に対して、「自分の子どもが通う学校の父親参加の入口、あるいは受け皿として設立された」[q03-D]など、父親自らが学校活動に関わるべきという問題意識が読み取れる。

2-2. 主旨・目的

調査対象とする12件の「おやじの会」について、活動の主旨・目的について、自由記述で求めた27の回答を整理した(図4)。「父親同志での交流」(9件)と「子供との交流」(8件)が上位を占め、「学校活動の支援」(5件)、「地域活動の支援」(3件)と続いており、「交流」と「支援」が主な目的である。「交流」は子供との交流とともに、父親同士の交流が求められていることがわかる。「支援」については、学校への協力は当然のこととし、地域への支援も含まれている。

2-3. 組織形態と運営資金の取得先

会の形態は、「PTAとは別の組織」と回答している会が6件と最も多い。一方「PTAの下部組織」と回答している会も3件ある(図5)。自由記述で「活動できる時に参加するという、ゆるいつながりの会」[q02-B]と述べられているように、組織として何らかの責任を課せられているわけではなく、勤労者のライフスタイルに即した柔軟な組織であるといえる。

運営資金については、「イベント活動ごとに関係者、参加者から参加費用として得ている会」が7件と最も多く、次に「イベント活動の売り上げ」も5件と続き、この2つが重要な財源となっている(図6)。

2-4. メンバーの構成および獲得方法

会のメンバー数は、最大で114名、最小8名、平均では30名程度である(図7)。メンバーは、一つの会を除いて現役とOBで構成されている。対象とする会においてOBメンバーが占める比率は、平均すると3割程度であるが、OBメンバーで8割近く占めているケースもある。

新規メンバーの獲得では、12件すべての「おやじの会」が「入学式を利用して案内配布・説明会の開催」を行っている。さらに、11件が「保護者がイベント活動に参加する際に勧誘する」等、できるだけ直接接点できる機会を活用している(図8)。

2-5. メンバー間の連絡方法

メンバー間の連絡では、12件すべての会が電子メールを利用しており、そのうちの7件はメーリングリストによる連絡網を活用している(図9)。自由記述による回答では、オンラインによるコミュニケーションを採る理由として「日常的には顔を合わせることができないことによるコミュニケーションの不足を補完できる」[q11-I]等があげられているが、これらオンラインによるコミュニケーションは主に土日以外の時間に行われることが多い。また「返信は無くとも、結構皆さん見ているようです。特にOBはメールで交流会の日時を知るようです。」「[q11-I]というように、メーリングリストは小学校との関係が希薄となったOBメンバーにとって、交流のきっかけにもなっている。一方、電話による連絡も7件と多い。「メールによる連絡は日程の連絡程度」[q11-M]というようなケースや、「メンバー間の交流を重視しているので、連絡は電話でするようにしている」[q11-E]というように、直接的なコミュニケーションを重視するという側面がある。

2-6. イベント活動の内容と開催場所

イベントは、「おやじの会」の目的である「支援」と「交流」を実行する重要な活動である。表2にイベントの内容と開催場所について、その割合を示す。

表2に抽出した65件のイベント内容を5つに分類した。
[①体験]学習型が最も多く、全体の4割近く(25/65)を占めている。小学校の教室を使って仕事や趣味などメンバーの知識を紹介する「おやじ先生」といわれるイベント、小学校の校庭にテントを設営し「おやじの会」メンバーと小学生でキャンプを体験する「キャンプイン〇〇小学校」と称されているイベントなどが主なものである。少数ではあるが、プールをつかってカヌー教室なども開催されている。
[②競技型]は13件あるが、主に小学校の校庭や体育館を使っている。マラソン大会やソフトボール大会、紙飛行機大会などであるが、紙飛行機大会では、他の「おやじの会」と飛行距離を競うことなど

図2 設立時期 (N=23)

図3 設立の契機 (N=12)

図4 主旨・目的 (複数回答 N=27)

図5 組織形態 (N=12)

図6 会費・運営費 (複数回答 N=17)

図7 メンバー数 (N=12)

図8 新規メンバーの獲得方法 (複数回答 N=30)

図9 連絡方法 (複数回答 N=27)

を通じて、交流につながっている。[③お祭り型]は17件と体験学習型の次に多く開催されている。小学校で開催される以外に居住地域の商店会や自治会などから依頼されて参加する事例も多い。その他には家族を含めたメンバー同志、小学校関係者との懇親など[④懇親型]で6件、[⑤地域支援型]では4件があげられている。

次に開催場所についてみると、ほとんどが小学校を含む居住地域で行われている。その中で最も多いのは小学校を利用している事例で、全体の7割(46/65)を占めている。校庭19件、学校施設(特別教室、体育館、プールなどで、一般教室の開放は見られない)21件、複合(校庭+施設)6件である。一方、小学校外の利用は3割(19/65)を占めているが、居住区域にある飲食店、地域児童館、コミュニティ施設などの施設利用が8件、神社、商店街、公園など屋外施設の利用が9件である。なお、居住地域外でも2件があげられているが、スキー体験や、底網体験である。

開催場所とイベントの関係を見ると、小学校開催では体験学習型が20件、競技型が13件と上位を占める。体験学習型は校庭から施

設まで幅広く開催されている。競技型は学校施設の利用が多いが、主に体育館である。お祭り型は、小学校では9件、小学校外でも8件と同程度であるが、小学校外で開催しているイベント全体の4割(8/19)を占めており、小学校外での主要なイベントとなっていることがわかる。懇親型は6件中2件が小学校、4件が小学校外で行われている。地域支援型は共に2件である。

3. 会合タイプによる「おやじの会」のイベント活動の比較分析

全ての「おやじの会」ではイベント活動とは別に会合を行っているが、会合を定例的にを行っている会と必要に応じて行っている会がある(以後、前者を定例タイプ、後者は非定例タイプと記す)。調査対象とした「おやじの会」では、定例タイプは8件、内6件は毎月、2件も隔月で開催している。非定例タイプは4件ある(図10)。

本章では、会合活動の傾向を捉えたうえで、会合タイプの違いが「おやじの会」の活動に及ぼす影響について比較しながら分析する。

3-1. 会合活動の比較分析

3-1-1. 会合の参加人数の比較

会合への参加人数は5人から10人程度である。会合タイプによる違いは、特に見られない(図11)。

3-1-2. 会合の目的の比較

会合の目的について、自由記述で求めた回答を整理した(図12)。イベント活動の打ち合わせ・進捗報告が10件、メンバーの懇親・紹介を7件の会が会合での目的としている。地域の情報交換も7件と、比較的多くの会で会合での目的とされている。

会合タイプ別で比較すると、定例タイプでは「活動の打ち合わせ」を目的としているのに対し、非定例タイプでは「メンバーの懇親」や「メンバーと地域の情報交換」とする傾向がある。

3-1-3. 会合開催場所の比較

会合に利用したことのある場所としては、小学校利用は10件あり、うち9件がPTA会議室、1件が校長室に隣接する応接室を利用している。専用のスペースを持っている事例はない。小学校以外では、居住地域内にある自治会や行政の集会室(2件)、特定の飲食店(6件)及びメンバーの自宅(6件)などを利用している(図13)。

主に会合を行っている場所については、12の「おやじの会」の内、小学校は7件、小学校外は5件が利用している。会合タイプ別で比較すると、定例タイプでは8件中6件が小学校の会議室を利用している。非定例タイプでは4件中3件が特定の飲食店を利用している。

3-2. イベント活動の比較分析

本節では、会合タイプとイベント活動との相関関係について比較分析する。対象とするイベント65件のうち、定例タイプが関わったイベントは47件、非定例タイプが関わったイベントは18件になる。

3-2-1. イベント主催率の比較

図14は、「おやじの会」が開催するイベントとのかかわり方を示している。全体では「おやじの会」が主催(企画から参加・運営まで行っている)するイベント率は68%、その他には「他の組織からの企画・参加依頼による」は23%、「イベントには参加しないが準備などイベントの支援をしている」は9%である。

会合タイプ別で比較してみると、主催するイベントの率は定例タイプでは77%に対して非定例タイプでは44%と定例タイプの方が高くなる。主催率が高くなる傾向がある。

表2 イベント活動の内容と開催場所

		小学校	小学校外	小学校			小学校外			全体		
				校庭	学校施設	校庭＋施設	屋内施設	屋外施設	地域外			
イベント内容	①体験学習型	メンバー等の経験知識を子供たちに伝えることを目的とする。		20	5	6	9	5	1	3	1	25
	②競技型	子供たちと競技を一緒に行うことで交流を図ることを目的とする。		13	0	2	11	0	0	0	0	13
	③お祭り型	学校もしくは地域での催し物の活性化を目的とする。		9	8	8	1	0	5	3	0	17
	④懇親型	コミュニティでの円滑な人間関係を築くことを目的とする。		2	4	1	0	1	2	1	1	6
	⑤地域支援型	学校・地域の活動の支援を目的とする。		2	2	2	0	0	0	2	0	4
全体				46	19	19	21	6	8	9	2	65

図10 会合の開催タイプ (N=12) 図11 会合タイプ別による参加人数 (N=12)

図12 会合タイプ別による会合の目的 (複数回答 N=32)

図13 会合タイプ別による会合開催場所 (複数回答 N=20)

3-2-2. イベント開催場所の比較

イベントの開催場所について比較すると、定例タイプでは小学校利用が68%(32/47)に対し小学校外が32%(15/47)、非定例タイプでは小学校利用が77%(14/18)、小学校外では22%(4/18)である(図15)。

しかし「おやじの会」が主催するイベントを対象に比較すると、定例タイプによる小学校外での開催が22%(8/36)、非定例タイプの小学校外での開催では0%(0/4)(図16)である。

3-2-3. イベントへの協力組織および参加者の比較

図17・18は会合タイプおよび開催場所別に、「おやじの会」が主催するイベントに協力する組織の有無、参加者を割合で示している。

協力組織については、両タイプとも小学校教職員が最も多く、続いておやじの会OB・PTA関係者・児童の保護者など、小学校に関係している組織と関与している。多くはないが、自治会・商店会・行政といった、地域の組織とも関与している。全般的に定例タイプの方が他の組織と関与しているが、特に「おやじの会」OBメンバーについて比較してみると、小学校で開催されたイベントへの関与は非定例タイプでは5割程度であるのに対し、定例タイプでは7割近くのイベントに関与している。さらに、小学校以外で行われるイベントでは9割弱のイベント協力しており、OBのかかわり方の差がみられる。その他には、大学サークル・他のおやじの会などがあげられているが、定例タイプにおいて多くみられる(図17)。

参加者については、両タイプともに小学生および保護者の参加が多い。一方、近隣住民およびその他については、定例タイプでの参加が多い(図18)。

3-3. 小結

本章では会合およびイベント活動について、定例タイプと非定例タイプによる比較を行った。

会合の場所は、定例タイプでは主に小学校を使ってイベント等活

動の打ち合わせを行っているのに対して、非定例タイプでは特定の飲食店においてメンバーの懇親をはかっている傾向が見られた。

イベントについては、非定例タイプに比べ定例タイプの方がイベントの主催率は高く、主体的に活動を行っていることがわかった。さらに「おやじの会」が主催するイベントに注目すると、非定例タイプでは小学校以外で行うイベントがみられなかったのに対して定例タイプは約1/3のイベントが小学校以外で展開していることが分かった。また「おやじの会」OBメンバーが小学校外でのイベントに関わる割合が高いことも明らかになった。

以上より、定例タイプにおいて活動における主体性、活動を展開する集団の場所の広がり、活動を展開する集団のネットワークにおいて活発な傾向にあると考えられる。

4. 会合場所の役割

「おやじの会」の会合場所には、メンバーがイベントの準備段階から参加するため、メンバー間の交流が生じやすい場所と考えられる。本章では会合場所に注目し、「おやじの会」メンバーを新規（入会を検討している保護者を含む）— 現役 — OB の3つのグループに分け、メンバーにとっての小学校の意味、そしてメンバーの交流から見た「おやじの会」の継続性について考察する。

具体的には、了解を得られた8件の「おやじの会」（以降「おやじの会」Aは、会-(A)と表記する）代表者に対して行ったインタビュー内容（調査Ⅱ）を分析する（表3-a～d）。なお、調査Ⅱによるインタビューでの発言は[int-C]（Cは会-(C)を示す）のように表す。

4-1. 会合場所と参加者の流れ（表3-a/b）

会-(A)は、毎月第四土曜日の夕方から、小学校PTA会議室で会合を行っている。開催日は、入学式の時に配布されるパンフレットや、ホームページなどを通じて積極的に公開しており、この会合から新規に参加する「父親」も多い。なお、OBも相談役的な役割として参加している。その他に小学校を拠点に活動している他の組織（PTA、野球チーム等）の参加も時々ある。会合の後に、特定の飲食店で二次会を開いてるが、定例会に参加したメンバーのほぼ全員が二次会に参加するが、ここから参加するメンバーも多い。

会-(C)は、毎月土曜日の日中に、校長室応接スペースで会合を行っている。開催日はホームページに公開している。会合には現役と区別なくOBも参加しているが、新規の参加者は少ない。その他に校長が参加している。会合後に、参加者の何人かで最寄駅近くにある特定の飲食店で二次会を行うことも多い。

会-(D)は、毎月土曜日の夕方に、小学校区内ある自治会集会所で会合を行っている。開催日は参加メンバーの都合に合わせて決め、メンバーにメールで通知している。会合には、OBも現役と区別なく参加しているが、新規の参加者は非常に少ない。

会-(E)は、不定期であるが土曜日の夕方に、学区外にある特定の飲食店で会合を行っている。開催日は、メールでメンバーに知らせている。新規に参加する「父親」もいるが、ほとんどがメンバーの紹介による。なお、他の組織と合同で会合を行うこともある。

会-(F)は、毎月平日の夜に、OBメンバーが経営するコミュニティ・カフェで会合を行っている。開催日については、メールリストによってメンバーに通知している。会合には、仕事帰りに参加するメンバーも多い。メンバーが新規の加入希望者を連れてくることも

①：イベントの企画運営 ②：他のイベントへの参加 ③：他のイベントの準備・支援

図14 イベントとの関与の程度

図15 イベント開催場所の比較

図16 おやじの会主催によるイベント開催場所の比較

図17 おやじの会主催によるイベント協力組織に関する比較

図18 おやじの会主催によるイベントへの参加者に関する比較

定例タイプ:
小学校型 N=28
小学校外型 N=8
非定例タイプ:
小学校型 N=8
小学校外型 N=0
イベント開催場所
小学校
小学校外

ある。

会-(J)は、不定期であるが日曜日の夕方に、最寄駅近くにある特定の飲食店で会合を行っている。開催日については、メールリストを使ってメンバーに通知している。会合には現役とOBの区別なく参加しているが、新規の参加者は少ない。

会-(K)は、必要に応じて小学校のPTA会議室で会合を行っている。開催日について入学式の時に宣伝しており、加入を検討している「父親」にとって見学程度に参加できる機会となっている。小学校での会合とは別に、学区内の特定の飲食店で平日の夕方から懇親会も行っているが、通勤帰りに立ち寄るメンバーが多い。

会-(L)は、隔月で土曜日の午前中に、小学校PTA室で会合を行っている。開催日は、入学時に配布する案内や、ホームページに公開している。加入を検討している「父親」が最初に参加する場になっている。また、定例会と同日の夕方に特定の飲食店で懇親会も行っているが、懇親会から参加するメンバーもいる。

4-2. 開催場所の選択理由（表3-c）

会-(A). (C). (L). (K)は、小学校と特定の飲食店を利用して会合を開催している。これらの会が小学校を利用する理由の一つは、「土日の日中であれば、比較的自由に使える」[int-A]、「先までの使用許可が取りやすく、その都度、不特定多数の参加が可能である」[int-A]など、土日であれば小学校の会議室は時間帯、人数、利用

表3 分析事例の概要および会場場所に関するインタビュー時の発言のまとめ

事例 (設立年)	おやじの会-A・定例タイプ (1992)	おやじの会-C・定例タイプ (2003)	おやじの会-D・定例タイプ (1992)	おやじの会-E・非定例タイプ (2004)
児童数	353	254	149	325
会員数	114/55 (総数/OB数)	50/8 (総数/OB数)	25/12 (総数/OB数)	10/5 (総数/OB数)
会場場所	小学校会議室／特定の飲食店 (状況で使い分け)	小学校校長室／特定の飲食店 (ほぼ常所)	自治会集会所 (2か所を交互に利用)	特定の飲食店 (状況で使い分け)
会場場所の地理的関係
会場場所と参加者の流れ
開催日と通知方法	メンバーが予定を立てやすいように毎月第四土曜日の夕方に行っている。開催日は入学式で配布する案内やホームページ等に公開している。二次会の日はメールでメンバーに通知している。	校長も参加できる毎月土曜日の日中に行っている。開催日はホームページに公開している。ホームページについては入学式の案内に配布している。	毎月土曜日の夕方に行っている。開催日は、メンバーリストでメンバーに通知している。	不定期であるが土曜日の夕方が多い。入学・卒業の時期、学校のイベントの後、登校が多い。開催日はメンバーリストでメンバーに通知している。
会場場所と選択理由	・小学校の会議室は土日はPTAが使うことがないので比較的自由に使うことができる。先までの使用許可が取りやすいくその都度不特定多数の参加が可能である。 ・小学校を拠点とする他の組織と重なることもあり交流の良い機会となっている。 ・会議後は必ず特定の飲食店で「懇親」を目的とする二次会を行っている。	・校長が活動に好意的であり、比較的継続的に利用できることから、活動の打合せは校長室応接スペースで行っている。 ・土日以外に打合せが必要な時にはメンバーの自宅で行うこともある。 ・定例会後にはほぼ参加メンバーの何人かで特定の飲食店で二次会を行っている。	・当初は小学校の会議室で定例会を行っていたが飲食店の禁止や利用時間帯など使い勝手の問題から自治会集会所を予約して行っている。 ・その後、同じ場所で行き続き飲食しながらの懇親をしている。	・小学校との関係が弱く、優先順位も低いため、学校会議室の使用手続きが煩わしい状況にある。 ・そのような理由から比較的・費用の融通が利く活動を応援してくれる知人が経営する飲食店で必要に応じて会合を行っている。 ・学区内には飲食店が少ないので学区外の繁華街で行うことが多い。
参加・継続のための工夫	新規、現役、OBメンバーは、それぞれ参加の意味合いが違っているので、それに応じた場と組織を設けることが必要と考えている。小学校での会合は、現役メンバー中心に行っているが、新規メンバーが会合の様子を見にきてから、徐々に活動や2次会に参加することが多い。一方、メンバーによる紹介の場合は、会への初参加が2次会というケースもある。定例会に参加するOBも多いが、2次会に参加するOBの方が多い。OB会をつくったので、2次会は二つの会の集まりにもなっている。今後、OB会による活動も発展させていきたい。	新規メンバーが最初から小学校での会合に参加するケースは少ない。イベントやネット上での活動報告を見てから、現役メンバーの紹介を介して参加するケースが多い。メンバーの更新についてはOBが少ないので特に意識していない。今後の問題と考えている。	イベントや母親を通じて動員している。会への参加はメンバーに誘われていくことが多いが、ほとんどは入会を前提にしている。多くのOBが会合に参加しているが、OBと現役との関係については、築いてきたネットワークは継承するためにOBの存在は必要と考えている。	ほとんどがメンバーやその家族の紹介による。会への参加が、入会を意味する。会を立ち上げたメンバーが、そのままOBとなっているので、特に意識していない。参加しやすさを考慮し、会費を抑えるようにしている。

目的などに対して自由度が高く、地域での時間が限られたメンバーにとって、小学校という場所は週末にイベント活動の打合せという活動に使える数少ない開かれた場所となっている。また「メンバーが予定を調整し易いように、第四土曜夕方に開催することになっている」[int-A] 会-(A) というように、定例的に会合を開催しやすい条件も整っていると考えられる。

もう一つには、「定例会は必ず小学校の会議室で行うことにしている。これはフォーマルな組織であることを参加者にはっきりさせるためです」[int-L] というように、小学校に子供を通わせる保護者にとって小学校は公的な場として認知されていることが理由と考えられる。つまり、小学校という公的な場所で行われる「おやじの会」の活動は、「父親」にとって活動に参加する大義名分を保証することにつながっており、新規に参加を検討している「父親」にとっても、開かれた場所として参加しやすい環境になっていると考えられる。

一方、会-(D)。(E)。(F)。(J) は、小学校ではなく自治会集会所や特定の飲食店で会合を開催している。特定の飲食店が選択される理由は、「小学校の場所が不便である」[int-F]、「当初は小学校で行っていたが、飲食、特に飲酒等は適当ではないので、比較的制約の少ない今の場所に落ち着いた」[int-D] など、小学校に比べ、仕事帰

りに立ち寄りやすい立地であること、小学校という場ではインフォーマルな「懇親」を目的とする活動は、特に飲酒など伴う場合など、相応しくないという共通認識があることから、特定の飲食店のような場所を選択していると考えられる。しかしながら、「事務的な打合せは、呑み始める前に行うようにしている」[int-J] というように、打合せに集中する上では適当でない。

4-3. 「おやじの会」継続のための場所の仕組み (表3-c.d)

4つの「おやじの会」(会-(A)。(C)。(K)。(L)) では、「活動の打ち合わせは学校の会議室で行い、その後で、希望者のみ近隣の飲食店で集まって懇親会をする」[int-C] というように、二つの場所を使い分けている。

ジーン・レイヴは新参者が実践共同体の一部に加わっていくプロセス^{注15)}において「アクセスの正統性と透明性」に注目しているが、小学校は参加の正統性が保証される「会合の様子を見ることのできる」[int-A] 開かれた場所として、段階的な参加を模索する新規メンバーにとって「正統的周辺参加」^{注16)}を可能にしていると言える。また小学校という場所では、「小学校を拠点とする他の組織と重なることもあり、交流の良い機会となっている」[int-A] というように、同一組織のみで閉じることなく、他の組織との交流も生まれやすい

表3 分析事例の概要および会合場所に関するインタビュー時の発言のまとめ（つづき）

おやじの会-F・定例タイプ（2001）	おやじの会-J・非定例タイプ（2004）	おやじの会-K・非定例タイプ（2002）	おやじの会-L・定例タイプ（2004）	
540	410	497	93	
30/5（総数/OB数）	40/21（総数/OB数）	15/3（総数/OB数）	20/5（総数/OB数）	
OB経営の飲食店（常用）	特定の飲食店（常用）	小学校会議室／特定の飲食店（常用）	小学校会議室／特定の飲食店（状況で使い分け）	
				表3-a
				表3-b
開催日は通勤通りに参加可能な平日の夜が多い。日時は、メールによってメンバーに伝えている。	土曜日が都合の悪いメンバーが多いこともあり、不定期であるが日曜日の夕方に行っている。開催日時については、メールでメンバーに通知している。	定期的ではないが、入学時期、イベント開催時期等に行っている。開催日時について入学式の時に案内を配布している。	隔月で土曜日の午前中に行っている。開催日時は入学時に配布する案内や、ホームページに公開している。	凡例 ◎：必ず参加 ○：良く参加 △：時々参加 ×：参加しない
・小学校は最寄駅から離れているため、以前は区の施設を借りたりしていたこともある。 ・2008年以降はOBが運営するコミュニカカフェを利用しているが、ここになってからは予約の心配も少なく、打ち合わせの時間を気にすることなく、比較的自由な使い方ができる。 ・また、その他の組織の利用もあるため予期していない交流が生じることもある。	・小学校の近くに適当な場所がなくメンバーが日常通勤に使っている最寄り駅近くにある居酒屋で行っている。 ・活動の打ち合わせなど事務的な話は、会合の最初に行い、その後はメンバーの懇親が中心の懇親会になる。 ・他の客から少し離れた奥の小上を利用している。	・不定期ではあるが、小学校で情報交換を兼ねた事務的な打ち合わせを行っている。 ・メンバーの懇親的な会合は、平日も含めた夜に地域の飲食店に集まっている。 ・イベントのアイディアなどは、特定の飲食店で会合の時のほうが、活発に意見交換されることが多い。	・会合がフォーマルな活動であることをはっきりさせるために、定例会は必ず小学校の会議室で行っている。 ・休日家族と過ごすことに配慮して、土曜の午前中に設定している。 ・その後、定例会とは切り離して、夕方から特定の飲食店で懇親会を開いているが、自由参加である。	表3-c
土日は家族と過ごすことを優先できるように開催日を工夫している。ほとんどがメンバーやその家族からの紹介による。メンバーが、新規参加者を連れてくることもある。OBの一人が開設したコミュニカカフェが会合場所ということもあり、現役とOBの区別なくOBも会合に参加している。	メンバーの紹介や、保護者としてイベントに参加することでメンバーとの面識を持った人が、会合に参加することもあるが、非常に少ない。OBが小学校支援に積極的に関わっていることもあり、現役・OBの区別なく会合に参加している。	とにかく強制にならないように考え、小学校での会合の案内を公開し、新規加入を検討している父親が、自由に参加できるようにしている。特にOBであることを意識することなく参加している。	入会を検討している「父親」の多くが、まずは小学校で定期的に開催されているこの会合に参加する。初期のメンバーがそろそろOBになる時期ではあるが、OBとして2次会に参加するようになると良いと考えている。	表3-d

と言える。

一方、特定の飲食店で行っている二次会は「懇親」を目的としているが、「小学校では事務的な打ち合わせを行い、イベントのアイディアなどは特定の飲食店での会合の方が出やすい」[int-K]という側面も持っている。また、「新規、現役、OBメンバーは、それぞれ参加の意味合いが違っているため、それに応じた場と組織を設けることが必要」[int-A]というように、OBメンバーや、必ずしも「おやじの会」の活動には積極的ではない現役メンバーにも参加し易い場を用意している側面もある。会-(A)においてメンバー数・継続年数・会合への参加人数などが多いが、このような環境が比較的整っていると言える。つまり会-(A)では、二つの空間の特性と参加への程度の違いを組み合わせることで、選択可能な参加の在り方を用意していることが関係しているとも考えられる。

このように、「おやじの会」では小学校と特定の飲食店を使い分けることによって、フォーマルな活動である「支援」を重視するメンバーとインフォーマルな活動である「懇親」を重視しているメンバーに選択可能な参加の在り方を許容する組織になっている。このような場所の仕組みは、活動の持続可能性の一助になっていると考えられる。

5. まとめ・今後の課題

5-1. まとめ

本稿では、男性勤労者の地域での交流について、「おやじの会」を対象に考察してきたが、地域社会での活動における主体性、地域社会の活動を展開する集団の場所の広がり、地域社会の活動を展開する集団のネットワークについての状況と関係性が把握できた。また、会合タイプで比較した結果、特に定例タイプにおいてその活動には活発な傾向が見られた。

男性勤労者のような人々にとって、地域とのつながりは、会社組織の外側にあるパーソナルな時間の積極的な活用から生じるものである。このため、学校施設のようなフォーマルな場を用いることは、その堅苦しさから敬遠される傾向があるようにみえる。しかしながら本調査の結果、小学校という場は安定的に定例開催しやすい条件が整っているのみならず、団体の活動の正当性を保証する場所という意味合いが付与されており、そのことが新規参加者が足を運びやすいという状況を作り出しているということがわかった。そして、やはり彼らの地域での活動は、フォーマルな場で終始するというのでは充足感を得られず、特定飲食店という場がインフォーマルな

交流を許容する場所として機能していた。この二つの場所が相互補完することで、選択可能な参加の在り方を用意しているのである。

地域との関係を構築したいと考える男性勤労者にとって、町内会・自治会やNPO活動への参加は一つの方法ではあるが、「おやじの会」のような選択可能な参加を許容する「ゆるい」つながり方は、個人では地域と結びつく機会を持ってない「父親」が再び地域に参加する有効なきっかけとなりうると思われる。上記のような2つの性格を持つ場を地域がどう用意するかが、今後の建築計画においても重要な課題であると思われる。

5-2. 今後の課題

本稿では論及しなかったが、調査でも交流場所として地域の自治会集会所やコミュニティカフェの利用が見られたように、地域にはさまざまな場所が交流に利用されており、小学校はその一例に過ぎない。今後、広範で質的な調査が必要と思われる。

また、「おやじの会」活動を通して獲得した地域との関係を生かし、小学校という枠組みから離れた地域活動に発展している事例などは、地域におけるコミュニティの再生問題の解決の糸口となり得ると考えられる。会-(A)においてみられたOB会による地域の商店街で行われるイベントへの参加などは、「おやじの会」の目的である「交流」と「支援」が、地域に向かった一例といえる。

最後に、地域社会は多様な背景をもった成員によって構成されており、本稿では小学生の子どもを持つ勤労男性に絞った調査であり、別のライフコースにある男性勤労者について考察することも今後の課題である。

注

- 注1) 杉並区では、公共サービスを行政だけで提供していくことは限界があるとし、官民協働に関するガイドラインを出している。その一つとして平成18年より「すぎなみ地域大学」を開校しているが、「段階の世代の地域還流を視野に、……」「社会貢献活動の実践者」「公共サービスの担い手」となる人材を育成」することを目的にしている(文献1)。
- 注2) 天野は、「サラリーマン」と呼ばれる男性勤労者こそ、戦後日本の典型的職業であるとした上で、いかに企業帰属意識がつくられてきたかについて指摘している(文献2)。
- 注3) 多賀が「特に、男女で明確に異なる役割が求められる社会では、男性と女性のライフサイクルは大きく異なる可能性が高い」と述べているように、性別役割分業体制のもとでは、多くの勤労男性は地域社会から孤立しているといえる(文献3)。
- 注4) 2009年時で、全国に4000以上の「おやじの会」(文献4)があるとされるが、石井は、「おやじの会」を個人の意思選択によって形成されるボランティア・アソシエーションの一つとして位置づけ、家族機能の外部化、生活の個人化が進行する中で、地域社会における中間集団としての機能に注目が集まっていると述べている(文献5)。なお、地域社会は未婚者、子どもという選択を持たない夫婦など、さまざまな家族形態によって構成されていることは言うまでもない。
- 注5) 調査でも「地域から一度離れてしまった男性にとって、町内会など従来からの地縁組織への参加は敷居が高い」という発言が見られたように、都市近郊部には地方出身者など地縁を持たない男性勤労者が多いと考えられる。
- 注6) 地域コミュニティに関する既往研究としては、栗原による団地居住者におけるコミュニティ意識に関する研究(文献6)、高橋による近隣における生活行為と空間利用の関係に関する研究(文献7)などがある。
- 注7) 人文地理学の分野では、ジェンダー的視点を踏まえた研究が進んでいるが、男性に焦点を当てた研究としては、村田による「男性を疎外する空間」(文献8)に関する研究、木村による「男性退職者による地域サークル活動への参加のプロセス」(文献9)の研究などがある。
- 注8) (文献10・11)。栗原は居住地域におけるコミュニティに関する一連の研究において、「団地または周辺コミュニティは主人の生活に対してはさほど意味を持たないが、主婦の生活に対しては大きな比重を占めるものといえよう」とし、主婦主体としたコミュニティとしての配慮を計画の上で考えて

ゆくべきものとしている。また、竹嶋は「地域住民とはいってもすべての人々が居住地域内で日常生活を完結させている訳ではない」とし、コミュニティ施設の一つである集会施設の計画において、居住地域を基本とするのではなく、日常通勤経路との係わりを重視している。

- 注9) NPO法人認証数などの伸び率の比較では1999年を1とした場合、2006年末では全国では18.05倍、東京都では13.97倍であるのに対して、杉並区では26.78倍である(文献1)。
- 注10) 東京都が2004年に区市町村教育委員会に行った調査によると、杉並区は東京23区の中では5番目に多かった。最も多かったのは、世田谷区で52団体からの回答があった。
- 注11) 杉並区のおやじの会のネットワークである「おやじネットワーク杉並世話人会」が、2006年に行った第5回交流会には28団体が確認されている。
- 注12) 2002年に杉並区の小学校にこどもを通わせる有志の父親の集まり(地域活動を楽しむ会)によって、杉並区立の43の小学校PTAへのアンケート調査が行われている。その結果は各小学校PTAに報告している。
- 注13) 今回調査では28校の小学校に「おやじの会」の活動が確認できており、データを追加し対象を23件とすることで、杉並区全体の傾向を示すことになると考えた。
- 注14) 1995年からは、第2土曜日に加え第4土曜日も休業日となった。なお、2002年以降は毎週土曜日が休業日となり完全な週休二日制となった。
- 注15) 本稿では「おやじの会」は実践共同体であり「新規メンバー」は新参加者として位置づけている。また、小学校での会合やイベント活動への参加は、共同体へのアクセスの一つの方法として捉えている。
- 注16) レイヴは(文献17)において、「正統的周辺参加」とは「新参加者が実践共同体の一部に加わっていくプロセスである」とし「実践共同体と、その成員性に伴うすべてに対する新参加者のアクセスが参加を強めていくための決定的な資源である」と述べている。

参考文献

- 1) 杉並区：杉並「協働ガイドライン(指針)」—NPO等と区とのよりよい協働の推進をめざして、2008
- 2) 阿部恒久、大日方純夫、天野正子編：男性史3—「男らしさ」の現代史、日本経済評論社、2006
- 3) 多賀太：男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース、世界思想社、2006
- 4) 読売新聞：2009年6月13日、2009
- 5) 石井クンツ昌子：「育メン」現象の社会学、ミネルヴァ書房、2013
- 6) 栗原嘉一郎他：団地居住者における人間関係の展開とコミュニティー意識(総括)—集団住宅地の機能に関する研究・6、日本建築学会論文報告集、No.139、pp.71-79、1967.9
- 7) 高橋恒他：近隣における生活行為と空間について—コミュニティ計画の基礎的研究・3、日本建築学会計画系論文報告集、No.306、pp.103-114、1981.8
- 8) 村田陽平：中年シングル男性を疎外する空間、人文地理、第52号第6巻、pp.1-19、2000
- 9) 木村オリエ(神田幸治編)：レジャーの空間—諸相とアプローチ、ナカニシヤ出版、pp.134-143、2009
- 10) 栗原嘉一郎他：団地居住者における人間関係の展開とコミュニティー意識—集団住宅地の機能に関する研究・1、日本建築学会論文報告集、No.91、pp.27-33、1963.10
- 11) 竹嶋祥夫：大都市通勤者の集会施設利用行動に関する研究、日本建築学会論文報告集、No.338、pp.107-114、1984.4
- 12) 菅原麻衣子他：小学校施設における自主的な空間利用に見る新たな空間需要、日本建築学会計画系論文集、No.637、pp.533-539、2009.3
- 13) 牛丸匠、小松尚：地域利用のために整備されたコミュニティ・スクールの部屋や場所の利用実態、日本建築学会計画系論文集、No.689、pp.1477-1485、2013.7
- 14) 曾根陽子他：1960年代のミニ開発住宅地における近隣コミュニケーションに関する研究—その1 飲み屋の利用実態から—、日本建築学会計画系論文集、No.608、pp.11-18、2006.10
- 15) 澤井雅敏他：地域社会と学校の関係を相互浸透させる父親たちの活動に関する研究—秋津小学校における父親たちの活動実態を通じて—日本建築学会大会学術講演梗概集E-1、pp.971-972、2002.8
- 16) 近藤由佳他：おやじの会に着目した壮年男性の地域参画要件に関する研究、日本建築学会大会学術講演梗概集E-1、pp.429-430、2007.8
- 17) ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー(佐伯胖訳)：状況に埋め込まれた学習、産業図書、1993

STUDY ON THE BASE OF FOOTHOLD FOR COMMUNITY BY WORKING MEN

From the actual condition of “Oyaji no kai” activities in the Suginami area

*Ikuya JINNO**, *Gen TANIGUCHI*** and *Kazuhisa TSUNEKAWA****

* Ph. D. Candidate, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, M. Arts

** Designated Prof., Graduate School of Engineering, Nagoya University, Dr. Eng.

*** Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Nagoya University, Dr. Eng.

As society increasingly ages while the birthrate declines, working men are encouraged to engage in their local community. This report focuses on “Oyaji-no-kai” as a model for working men, and investigates the general spatial tendencies of working men’s activities, the common characteristics and aspects of their tasks. It also clarifies how a community base can encourage active involvement of this demographic, by analyzing their activities, their activity locations, and their social networks.

All participants gave prior consent through interviews. Surveys were distributed to 12 “Oyaji-no-kai” representatives based in public elementary schools in the Suginami area. Eight principal members of these groups agreed to be interviewed.

The “Oyaji-no-kai” and their analyzed activity trends are summarized in Section 2 of this report. Many “Oyaji-no-kai” are created by volunteer fathers. The average group membership is 30, but the largest group holds 114 members. Members are the fathers of current students and alumni (the latter comprises approximately 30% of members). All of the groups communicate by email, especially during weekdays. Information sent out through the mailing list enables alumni members to maintain contact with each other. “Hands-on-learning style” approaches frequently take place at elementary schools; “festival style events” are held at other venues.

“Oyaji-no-kai” meet either periodically or as required. Section 3 presents a comparative analysis of the event activities of both meeting types. The meetings of “periodic meeting” groups concern upcoming events, while those of the “sporadic meeting” groups focus on social gatherings. Periodic meetings are frequently held at the school, while the aperiodic groups tend to meet in certain restaurants. Comparing their event activities, groups that meet periodically hold more events than the aperiodic groups, and use locations outside the elementary school. Alumni members participate at a higher rate in these groups.

Since group activities are influenced by meeting style, we interviewed members on the purposes of their meeting locations. The results are presented in Section 4. Weekend meetings are regularly held at elementary schools, which become continuous gathering spots. Schools are also regarded as open spaces, especially by members whose children attend the schools. For this reason, individuals who are considering joining the group can easily participate in meetings. On the other hand, pubs provide more amenable meeting places to alumni members who are interested in social meetings or who lack enthusiasm for other events.

This research highlights not only the importance of elementary schools as venues for stable regular meetings, but also their advantages which can ensure the legitimacy of group activities. This environment also assists new members to participate in the meetings. Local group activities are not limited to formal occasions, but include casual gatherings at certain pubs, enabling members to fully engage with the group. “Oyaji-no-kai” provides complementary opportunities to facilitate active group membership. Providing two different opportunities would appear to be an important task in future architectural planning of local communities.

(2014年 2月10日原稿受理, 2014年 8月22日採用決定)